
時の相談者

鳥羽爽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の相談者

【Zコード】

Z0884Z

【作者名】

鳥羽爽月

【あらすじ】

高校生の玲子は放課後いつも寄つて いる店がある。その店の店員である口の悪い青年は言つ。「この店に客は来なくていい」と。そんな時、玲子に不幸が訪れた。

2人を取り巻く命のはかなさと人間関係の温かさを描く、現代SFファンタジー。

処女作です。更新亀ります。

お気に入りの時計店

放課後。

ホームルームが終わり、生徒たちは部活動に励んだり、教室に残つて勉強に勤しんだり、友達と寄り道しながら帰つたり、みんな思ひ思いに過ごしている。

玲子はどの部にも所属していない、いわゆる帰宅部であつたし、学校に居残つてまで勉強をしようといつタイプでもなかつたので、いつもと同じように帰路に着いた。

今までならこのまま道草を食うでもなくまっすぐ自宅に帰つていた。けれども玲子は普段家へと帰る道から斜めに伸びている、人が2人通つてぎりぎり対向できそくなくらいの細道に入つていた。その道は、両側を周辺の民家のものと思われるブロック造りの塀にぐるりと囲まれていて、そこを通る者を外界から孤立してしまつたかのように錯覚させる。

玲子は道をどんどん進んでいった。

しばらくして延々と壁の続いた景色が途切れ、視界が開けた。するとその広場の一角にレトロな雰囲気を醸し出している一軒の店があつた。都会の喧噪から外れて建つているその少し浮き世離れした建物の存在は、ここに来る者にまるで異世界にでも迷い込んだかのように思させた。

その店には、『佐藤時計店』という文字が刻まれた看板が掛けられていた。

玲子がこの店を見つけたのはほんの一週間ほど前だつた。

その日の放課後、いつものように下校していたとき、ふと寄り道をしたい衝動に駆られた。そこでさつきの細道に入つてみるとしたのだった。玲子は以前からその道がどこにつながつているのか

気になっていたし、少しいつもと違う道を通るだけでなんだか冒険をしているようでわくわくした。

そして細道を抜けてたどり着いた先で、この『佐藤時計店』を見つけたのだった。

それから玲子はこの時計店を気に入り、放課後毎日訪れていた。

玲子は木で出来た扉を開けて店の中へ入った。

「こんにちはー」

『佐藤時計店』という名前通り、店の中にはあの歌に出てきそうな大きくてこいつ古そうな時計や、この店の落ち着いた雰囲気にぴったりな茶色い革のベルトの腕時計たちが、チクタクと心地よいリズムを刻みながら所狭しと並べられている。玲子はこのいつも生活しているものとべつのじかんにを旅しているような、静かで温かい雰囲気をとても気に入っていた。

一番に彼女を出迎えたのは、雪のように真っ白な体で首に鈴の着いた赤い首輪をした一匹の猫だった。

「こんにちは、シロちゃん」

そう声をかけると、この店の看板猫であるシロはにゃーと一度鳴いてから、鈴の音を響かせながら店の奥へ行ってしまった。

「いらっしゃい玲子ちゃん。毎日よく飽きずに来るね

シロと一緒に奥から出てきた男はこの店の唯一の店員であり、時計職人だった。名を時雨じぶるという彼は、まだ二十代真ん中から後半くらいに見えるのに、一人でこの店を切り盛りしているようであった。スラッシュした長身で顔立ちも整っている。そして優しげな笑みをその顔に浮かべていた。

「今日もすばらしい営業スマイルですね、時雨さんー」

玲子がにこり笑つて元気いっぱいにそう言つと、途端彼の顔が

黒さを帯びた無表情に変わる。

「大声でいうんじゃねえよ。ほかに客がいたらどうしてくれんだ、あ？」

「いいじゃですか、別に。心配しなくともいつも私しかお客様さ
んいないんだから」

「そうか、そんなにしばかれてーか」

時雨はそう言いながら拳をポキポキ鳴らしている。口調だけ聞いていればどここの不良だよ、と突っ込みたくなる。今の時雨には先ほどまでの優しそうな笑顔と雰囲気が微塵も感じられない。本当に同一人物か疑いたくなるくらいだ。彼は店にお客さんがいるときはとはいえ玲子が言つたように滅多に客など来ないのだが、つきまでの営業スマイルを顔に張り付けていかにも人が良さそうで爽やかな好青年を演じているらしい。

しかし、玲子に至つては油断でもしたのか彼女がこの店を見つけた次の日にはすでにばれてしまつっていたのだが。

不意に時雨は玲子の後ろ、店の入り口である扉のある方を見つめた。彼だけでなくシロもその辺りをじっと眺めている。

何があるのだろうか、と玲子も視線の先を見るべく振り返つた。が、変わつたものは何もなく、ただ入ってきたときと同じように扉があるだけだつた。

「客が来なくても別にいーんだよ、この店は」

玲子はしばらく頭上にはてなマークを飛ばしながらきょろきょろと辺りを見回していたが、時雨が呴いたのを聞いて彼の顔を見た。彼はいつも通りの無表情だつたが、玲子には一瞬、彼が営業スマイルとは違ひ心から慈しむように微笑んでいた気がした。しかしぬにはもういつもの表情に戻つていたのと、彼の性格からして程遠い表情だつたため見間違いだらうと思うことにしたのだった。

「何言つてんですか、お客様いないと商売成り立たないでしょ

「つー諦めちやダメですよー。」

「諦めてるとかじやねーし。つーかガキが商売語つてんじやねーよ
何となく沈黙に居心地の悪さを感じた玲子は、時雨の言葉をえて
て冗談っぽく捉えてみた。すると彼がいつもの調子で返してきたの
で玲子は少し安心したのだった。

やつこいつこねうちに時間も遅くなつてきたので、玲子はそろ
そろ家に帰ることにした。帰り支度をして扉の前で時雨に声をかけ
る。

「また明日も来ますね。時雨さん、シロちゃん、セヨーない
」
そう言つて扉の向こうに消えた玲子を見送つた後、時雨はしづら
く扉を見つめてぽつりと呟いた。

「…………寧ろこの店には客なんて来てくれない方がいい。」

言つた彼は声色にいつもと変わらず淡々としたものだったが、
その表情は痛みを我慢してこらめるような、それでいてどこか淋しそう
なものであった。

お気に入りの時計店（後書き）

初めて小説書きました。拙い文章ですがよろしくおねがいします。パソコン入力と話考えるのがマイペース、というか遅いので更新が停滞すると思われますがご了承ください。

突然の不幸

次の日の午前最後の授業で、子守唄と言つても過言ではない先生の話を聞きながら、私は欠伸をかみ殺した。

ふと窓の外に目を向ける。今季節は秋。校舎の3階にある私の教室からは、ほんのり色づき始めた校庭の木々がよく見渡せた。毎朝下駄箱からの遠さを恨めしく思つてはいても、この窓から見える景色は結構好きだつたりする。

紅くはなつてきているが、まだ見頃とはいえない木々をぼんやりと眺めていた私の脳裏に、幼い頃から親友と毎年見ていた、枝を大きく広げる色鮮やかな紅葉もみじが浮かんだ。

そういえば、中学の途中くらいからだらうか、2人共忙しくて見に行かなくなつてしまつていた。今度誘つてみようかな。そんなことを考え、私は再び眠くなるような授業に耳を傾けながら、なかなか進まない時計の針を気にするのだった。

昼休みには毎日、親友の麻奈美と2人で弁当を食べていた。今日もいつもと同じように、授業が終わつた後彼女が私の席にやつて来て、前の机を私と向かい合わせになるように移動する。

麻奈美とは小学生の頃から仲が良く、小・中・高とずっと同じ学校に通つている。小学校一年生の時に、私たちが住んでいる町の近くにある山に遊びに行つた。その山は比較的小さな山で、道が舗装されていて遊歩道のようになつており、子供でも登るのは難しくなかつた。そのため、近所の小学生たちにとつて、絶好の遊び場となつていたのである。

登り切つた先には、休憩できるように屋根の着いたベンチがあり、そばに一本の大きな紅葉の木が立つていて。その紅葉を毎年2人で見に行くのが、私の毎年の楽しみだった。とはいへ最近はもう行か

なくなってしまったのだけビ。

「さっきの授業、すこし眠かった。危うくシャーペン落としそうになっちゃったし」

弁当を食べながらたわいもない話をしていたとき、私は意を決して尋ねてみた。

「そういえばさ、麻奈美は土田ひま？」

すると彼女は暫く考える風にして言った。

「じめーん！ 土曜も日曜も部活があるんだよね」

彼女はバレー部に所属している。この学校のバレー部は練習が厳しいことで地元では少し有名だった。休日も練習があつて忙しいのだろう。

「…そつか、じょうがないね」

「ほんとごめんねー」

「いやこっちこそ忙しいのにごめんね。久しぶりに遊びたいなーと思つただけだから」

そういうえば、今までもこんな感じで行かなくなつてたんだっけ。でも仕方がない。小学生の頃と違つて遊ぶ暇がなくなつちゃつてるのは確かだし。もうあの頃みたいに麻奈美と紅葉を見ることはないのだろうか。そう考えると少し寂しかつた。

そんな気持ちを隠すかのように、私は再び弁当を食べながら世間に花を咲かせるのだった。その頃空は幾重にも重なつた暗雲が太陽の光を遮り、辺りを少し薄暗くしていた。

その日の放課後も玲子は佐藤時計店に向かっていた。しかしあの紅葉のことを思い出したからか、いつもよりも気分が沈み考え込んでいたので、他の下校している生徒や道を走る車の音も耳に入りづらくなつていた。

もう一度あの紅葉を見に行くことはなくなるのだろうか。もう
いつそのこと1人で見に行つてしまおうか、いやいつかきっとまた
2人で見に行けるはず。

そんなことを考えながらとぼとぼ歩いて、あの細道の手前の交差点まで来た。

さつきも言つたように、玲子は深く考え込んでいたため周りの音
が聞こえなくなつてゐるに相違なかつた。だから彼女は確かに歩道
の信号が青になつてから歩き出したのだが、赤信号にも関わらず突
つ込んでくる車に気がつかなかつたのだ。

プアアアアアアア

けたたましい車のクラクションの音が聞こえたのを最後に、玲子
は意識を手放した。

どこか遠くの空で一筋の稲光が走つた。

突然の不幸（後書き）

ありがとうございました。
ショーストーリーになる予定です。
更新遅くなつてすみません。

本性と理由

いつもならそろそろ玲子が店に訪れる時間だらう、と店の扉を見ながら作業している手を止めて時雨は思つた。

いつの間にか外では雨が細く霧のように降つていた。

本当は来ない方がいい。この店は本来玲子みたいな人間が来るような場所じやない。時雨は視線を手元に戻し仕事を再開した。

それから暫くの間時雨は時折シロの相手をしながら仕事を続けていたのだが、不意にまた扉に顔を向けた。シロもまた扉の方向を見た。

そこに立つっていたのは玲子だつた。しかし不思議なことに彼女が扉を開ける音も誰かが近づいて来る足音も聞こえなかつた。ああ、やはり。

「考え方しながら歩いてたら、いつもより遅くなつちゃいました」
彼女はそう言つて少し困つたように笑つた。時雨は彼女を見つめたまま、だがその言葉には答えない。

外は雨が降つていても関わらず、彼女は少しも濡れている様子はなかつた。雨は決して強くはならず、弱いままじんわりと大地を濡らし続けている。

暫くの沈黙が過ぎ、時雨は漸く口を開いた。

「もう生きていかないのか……」

そう言つと玲子は笑顔を若干強張らせてこくくりと頷いた。

「時雨さんには幽霊が見えるんですね」

幽霊。自分で言つても全く実感が湧かない。なので涙も出なかつた。

つい数十分前に起じた事故で玲子は命を落としてしまつたのだつた。

「ここに来る途中に事故に遭つて……、だからですかね? 何となくここに来ちゃいました」

「それはちがうよ」

「?」

一瞬、玲子にはどこから声が聞こえたのか分からなかつた。この場にいるのは玲子と時雨だけで、さつきのは時雨の声ではない。彼はと言えば、声など聞こえなかつたかの様に平然としている。

「レイコはレイコじしんのいしでここにきたわけじゃないよ」

再び発された声が聞こえた方向を見ると、そこにいたのは白い猫だつた。玲子は目を見張つた。

「今の、シロちゃん?」

そう聞くとその白猫は悪戯っぽい笑みを浮かべた かのようこそ、玲子には見えた。

「びっくりした? ぼくはふつうのねこじゃないんだ。うんとながいきして“ねこまた”になつたのさ」

猫又というのではなく、猫が長生きして尾が2つに分かれ、よく化けると言われているもののことである。しかしシロの尻尾は2つに分かれている様子がない。

するとシロは玲子の視線に気付いたのかその長い尻尾を一振りした。次の瞬間にはシロの尻尾は2つに分かれていた。

玲子はびっくりして思わず尻尾を凝視した。見間違いなどではなく、確かに2本あるそれは自由気ままに揺れている。

「こつただろ、ねこまだつて。しつぽがふたつあるのなんてふつうさ。……それでレイコがここにきたのはきたかったからじやなくて、このみせがレイコをよびよせたんだ」

どうこうことだらう。

玲子がこの時計店を見つけたのは確かにその場の思い付きだつたが、しかし自分の意志での道を通つたと彼女は思つていた。

あの日彼女が何となくあの道を通つたのは、偶然ではなく必然だつたと言いたいのだろうか。

「この店は死期の近い人間が訪れる場所だ。ここを訪れた者達は死後再び店に来る。たいていの奴は何か悩みを抱えていて、ここに相談に来るんだ」

それまで陰しの顔をして押し黙っていた時雨が、ここにきて口を開いた。

「時計職人つづーのは俺の表向きの仕事。実際はここに来る死者達の相手をしてるってわけ」

「それで、どうしてきみはここにきたの？」

シロにいきなり話を振られて、玲子は少し狼狽えた。彼らの話から察するにつまり玲子も悩みを抱えていることだろう。すると、やはり事故に遭う直前まで脳内を占めていたあれか。

「…………死んじゃつたつてことは、もつ親友と遊ぶことが出来ないんですかね？」

ぐだらない話をして笑い合つことも2人で並んで歩くこともいつしょに紅葉を見に行くことも、もう出来ないのだろうか。

最近休日に2人で遊んだりすることが少なくなつたが、またいつかお互いが忙しくないときに紅葉を見に行くだろうと思つていた。今は無理でもいつか、きっと。遊べないことを嘆いてはいても、心の奥底では一度と遊べなくなる日なんて来ないと思っていたのに。

本性と理由（後書き）

微妙なところで終わってしまいました。
次は少し短くなるかもしません。
バランス悪くて申し訳ないです……。

ありがとうございました。

玲子が泣きそうになるのを堪えていると、一度シロと顔を見合わせた後時雨が話しだした。

「いや…、この店に来店した客であるお前の悩みを出来るだけ楽にしてやるのが俺の仕事だ。玲子、お前に1日だけ時間をやる。それを使ってその親友とやらに別れを済ませて来い」

玲子は耳を疑つた。彼女はもう一度と麻奈美と遊べないのかと彼らに問い合わせたが、本心では完全に諦めていて期待などしていなかつた。

「そ、そんなのどうやつて……」

「ぼくらにはできるんだ。ときをあやつれる。あたえてあげられるじかんはかぎられているけどね」

なんて非現実的なのだろう。そもそも今の玲子の存在 자체が現実的とは言い難いのだが。死者の悩みを聞くと言つても、カウンセリングのようなことをするのだと思つていた。

玲子は死期間近の人々がこの店に引き寄せられる理由がほんの少しだけ、わかつた気がした。

この店は、ここの人達は、死してなお心残りを持つ自分に救いの手を差し延べてくれる。

「俺達がお前に与える1日の間は他の人間にもお前のことが見えるし話せる。死ぬ前と何も変わんねー状態だ。ただし向こうにはお前が死んだことは一時的に忘れてもらつてるからくれぐれも気をつけろよ。ぼろを出して相手に違和感を感じさせんじゃねーぜ。ばれるからな」

「もとに戻るにはどうすればいいんですか?」

「そのときがくればしづんにもともどるわ。きみはここのおきなぐじょうぶつできるよつこきみのともだちとおわかれをしてくるだけいいんだよ」

ついに麻奈美と今生の別れになるのだ。それなりの覚悟をしていかねばならない。

もしこの店を見つけていなかったら、心残りがあるまま成仏していたかもしない。いや、成仏すら出来ていなかつたかもしないだろう。玲子はここに来れたことをとても幸運に思つた。

「それじゃ、心の準備はいいか？」

「えつ、もしかして今からですか？」

「当たり前だ。ぐずぐずしてたつてどうしようもねーだろ。第一、他にすることがない。」

言われてみればその通りだ。玲子はおとなしく腹を括る口にした。

深く、ゆっくりと深呼吸をする。

「よし、送るぞ。」

時雨は指をぱぱんと一回鳴らした。すると店にあるたくさんの時計たちが一斉に、しかし速度はまばらに回りだした。と同時に、玲子の体がだんだん淡い光に包まれていく。それはまるで内側から温かくなつていくような、不思議な感覚だった。

彼女が光に包まれたまま、みるみるしつこく薄くなつてしつこくに消えてしまう直前に、シロは言つた。

「ぼくたちもどこかでみまもつているからね。こつてひつしゃい」

玲子はその言葉に勇気をもらって、すつきついた表情で最後の一日に旅立つていった。

店の窓から覗く空は、さきまでの雨が嘘のよつと青く広々と澄み渡つていた。

救いの手（後書き）

やはり短くなってしまった。
すみません。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0884z/>

時の相談者

2012年1月14日19時48分発行